

話し合いを通じた国語の授業

～表現の幅を広げ、話し合い活動を充実させるために～

林田 恵実・小野 敦也・馬杉 翠・大谷 典子

人工内耳装用児は、補聴効果の高い児童が多い。しかし、国語科の話し合い活動において、「読みが表面的である」、「心情を表す語彙が少ない」などの課題が見られ、指導者は話し合いが深まらないと感じている。そこで、表現の幅を広げ、自分の思いや考えを正しい文の形で話して伝えられるようにすることや、根拠を基に意欲的に話し合いに参加できるようにすることを目的とし、指導実践を行った。その結果、児童らは、自分の言葉で思考し、表現できる場面が増えてきた。

キー・ワード：人工内耳装用児 言語活動評価チェックリスト 話し合い活動 表現の幅

1 はじめに

新学習指導要領に示される聴覚障害の状態などに応じた言語活動の充実～人工内耳装用児に対する全国調査と実践研究に基づいて～（鄭、2021）では、『本調査の対象となった聴覚障害児については、人工内耳を装用したことで、これまでの補聴器装用児に比して聞こえの状態が改善していることがうかがわれた。一方で、これまでの聴覚障害教育において重要視されてきた、言語力や思考力の向上については多くの課題が残されており、人工内耳装用児に対しても、丁寧な指導が必要であることが示唆された。』と述べている。本校も、人工内耳装用児の割合が増えており、日々の実践の中でも、「読みが表面的である」、「心情を表す語彙が少ない」などといった課題のある児童が多いと感じている。国語科での話し合い活動でも、聴覚を活用して話を聞いてはいるものの、ことばの表出に課題があり、話し合いが深まっていかない。そこで、話し合い活動を充実させるために、表現の幅を広げていく実践を行う必要があると考えた。

2 目的

表現の幅を広げ、自分の思いや考えを正しい文の形で話して伝えられるようにする。また、どうしてそう考えたのかといった、根拠を言えるようにし、意欲的に話し合いに参加できるようにする。

「話し合いに参加できる」ことについては、根拠が分かっていること、友達が言った意見をもとに考え直すこと、共感したり疑問を抱いたりすること、きちんと思いを表出することと捉えた。

3 方法

小学部で言語活動評価チェックリストを用いて評価・分析を行い、児童の言語活動に関する実態と課題を調査した。

その上で、補聴効果が高いものの、読解力や、聞く態度・話す力に課題がある2名を選出し、PDCA記録用紙(Plan と Process、 Do、 Check、 Action)を用いて手立てを考え、指導実践をした。

4 対象児の特徴

4年A児 人工内耳右耳装用（右耳の装用閾値の平均：39dB；発音明瞭度：96%）

4年B児 人工内耳右耳装用（右耳の装用閾値の平均：25dB；発音明瞭度：78%）

A児は、補聴効果が高く、発音明瞭度も高い。聴覚をよく活用しており、話し手を注視しながら聞く態度も育ってきているが、聞いたことを基に考える力は未熟である。

国語科の学習では、文章の内容を正しくつかみ、要求に合わせて正しく考えながら答えられることが増えてきた。また、「だけど」「だから」などの接続

詞を使い、自分の経験や知識、分かったことを基に詳しく発言できる時もある。

その一方で、教師が促さないと単語で受け答えをしたり、文末まできちんと話さずに済ませてしまったりするという課題がある。

B 児は補聴効果が高く、聴覚をよく活用して、口話のみで会話をすることが可能である。傾聴態度も育ってきているが、発話の流暢性が低く、話声のリズムも不自然である。分からないときや自分の思いが伝わらないときにはすぐにあきらめてしまい、本人から尋ねることはない。

国語科の学習では、文章の内容から適当と思うものを選んで答えようとするため、文章から抜き出す形で答えることが多い。また、自信のなさから、挙手して発表することに消極的であり、周囲に伝わるように話す意識が低い。

A 児、B 児とも、特に、自分の気持ちや考えを伝える場面（感想を伝え合う場面）、物語文で登場人物の気持ちを想像して考える場面では「いやな気持ち」「うれしい」など、特定の言葉を多用することが多く、表現をふくらませることが難しい。

そこで、色々な表現語彙を増やし、根拠を基に自分の気持ちをきちんと伝えられるような支援や指導が必要と考えた。

5 指導実践

表現の幅を広げ、読みを深めるための指導として、以下のような指導実践を行った。

(1) 生活場面における指導実践

学習場面だけでなく、生活場面でも、文の形できちんと受け答えができるように適宜指導を行った。相手を見ることや、話す速さ、口形、最後まで話すことなども意識して話そうとする姿も見られた。

(2) 国語科の授業における指導実践

国語科の授業では、自分は理解していても、相手に正確に伝わっていないことが多かった。そこで、発問を増やして、より詳しく説明させたり、他の児童に分らなかつた部分を尋ねさせたりしながら、相手に分かりやすく伝えられるように指導を行った。

気持ちを考えさせる問いに対して「嫌な気持ち」などの抽象的な表現で答えた場合には、「どうして嫌な気持ちだと思ったのか。」「何が原因で嫌な気持ちになったのか。」「嫌な気持ちとは、悲しい、怒り、悔しいなどの他の表現に当てはまるものはないか。」など、根拠を尋ねたり、類語で表現させたりして、表現の幅を広げられるように指導を行った。初めの方は、「うーん……」と考え込んでしまい、答えるまでに時間を要した。そこで、似たような経験をしたことがないかを想起させたり、例を挙げたりすることで、より気持ちに迫れるような支援を行った。まだ、表出するまでに時間はかかるが、教師や友達とのやり取りを増やしたことで、少しずつ自分の思いや考えをもって表現できるようになってきた。

(3) 個別での指導実践

教師と1対1で好きな話題を話す時間を設けて、児童が自分のペースで主体的に話を進められるような場面を設定した。1つの話題について対話を重ね、やりとりの練習を行った。

6 児童の変化

国語科の授業だけでなく、その他の学習や生活場面でのやり取りを通して、単語だけで受け答えをするような場面はほとんど見られなくなった。教師が促したり、発問の仕方を変えたりすると、時間はかかるが、自分の言葉で考えて話すことができるようになってきた。また、他の児童の考えを聞いた後に、自分の考えを述べたり、自分から周囲に積極的に話したりするなど、話し合いに参加しようとする姿も見られた。新たな語彙の獲得について不十分な面もあるが、色々な表現の仕方に触れる機会を増やすことはできた。また、学校行事のことを日記や作文で書いた際には、授業で学習した言葉を使ったり、色々な表現語彙を使ったりすることができるようになってきた。国語科の読む学習場面では、文章から抜き出す形で答えたり、簡単な答え方をしていたりしたものが、文章を手掛かりに自分なりの表現を取り入れて答えることが増えた。また、文章から読み取っ

た内容と自分の生活体験を積極的に結び付けて、積極的に読む姿勢が見られるようになった。

7 今後の指導や支援

今回の指導実践で、児童らには、自分の言葉で思考し、表現できる場面が増えてきた。今回のような指導実践は、今後も継続して行っていく必要があると思われた。

A 児は、他の児童と比べると知っている語彙も多く、使ったことはなくても、耳にしたことがあるというような反応がよく見られた。今後も発問の工夫をしながら、児童の知識や言葉をたくさん引き出せるようにしていきたい。また、児童の経験から、その時の様子を想起させたり、気持ちをより深く考えたりできるような指導や支援を考え、表現の幅を広げられるようにしていきたい。

B 児は、言葉の聞き取りや、コミュニケーション活動があいまいにならないように、今後も丁寧な確認を続けていき、より自信をもって周囲に働きかけられるようにしていきたい。また、1対1での話し合いや日記の指導を通して、表現の幅を広げられるようにしていきたい。

A 児、B 児ともに、表現の幅を広げ、話し合い活動を充実させるための指導として、国語や読書などを通して、いろいろな表現に触れる機会を多く設定していく必要があると考えた。また、引き続き、聞き手に伝わる話し方を意識させながら、継続した指導を行う必要がある。指導の中で、どうしてこれらのことが必要なのかを児童自身に考えさせることで、自己理解や他者理解、障害理解にもつなげていきたい。

今回は、表現の幅を広げることに焦点を当てて実践を行ったが、この他にも、話し合いを深められない児童には、以下のような課題が多いと感じている。

- ・自己の聴力を過信して、話し手を見ず、内容を正確に捉えていない。
- ・分かったつもりになっている。
- ・自己本位な行動や思考が多い。
- ・話のつながりや、事柄の関係を考えながら聞いた

り書いたりすることが難しい。

話し合い活動を充実させるためには、これらの課題にも働きかけつつ、人工内耳装用児の聞こえの特性を理解し、児童の興味・関心を引くための手立てや、内容理解を促す視覚的な手掛かり（文字情報、表情、教師の話し方）の改善が必要だと思われる。

〔付記〕

本研究は、文部科学省「令和3年度特別支援教育に関する実践研究充実事業」の一環として実践されたものである。また、本研究は、本校小学部保護者の同意のもとに実施され、個人情報の取り扱いを含め、筑波大学附属学校教育局の研究倫理審査会の承認を得ている。

〔参考文献〕

鄭 仁豪（2021）

新学習指導要領に示される聴覚障害の状態などに応じた言語活動の充実～人工内耳装用児に対する全国調査と実践研究に基づいて～,61.254.